

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	堀内 隆仁
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員	兼環境情報学部教授	諏訪 正樹
	副 査	政策・メディア研究科委員	兼環境情報学部教授	石川 初
	副 査	政策・メディア研究科委員	兼環境情報学部教授	中西 泰人
	副 査	東京都立大学健康福祉学部／人間健康科学研究科教授		西村 ユミ
学力確認担当者：				
論文の題目は「競技と生活を一体と捉え身体を問い直す身体知の学びの実践 ～身体部位や情景的体感への志向性を促す「表情」感得ツールの制作を通して～」である。 身体知の学びにおいては「個人固有性」にまつわる難問が学びの阻害要因になりやすいことが論じられてきた。第一に、身体フォームには効率性という観点での普遍的な理想像はあるものの、身体の個人固有性を考えるならば理想像にはそれなりの幅があることになり、学び手が自身にとっての理想的フォームを探ることは難しいこと、第二に、理想的フォームを見出したとしても、身体で実現するためにどの身体部位や環境変数に意識を向ければよいのかは自明ではないことである。 これらの難問を解決すべく、学び手は理論や他者のアドバイスを参考にしながらも、運動の試行と身体感覚の微妙な差異の感得を繰り返し、理想的フォームを探りつつ、同時に普遍性と個人固有性の境界も見出さねばならない。その過程では、自身の意識・身体感覚・身体部位の動きなどをことば化しながら「身体のありよう・ありかたを問い直す」模索が必須である。 堀内くんは十種競技の競技者であり、彼の第一の研究（論文の第一部：第5章から9章）は、自身の「走り」のスキルを対象にして日々実践とことば化を繰り返し、身体知の学びにおいて自身の心身にどのような認知が生じ、どのように学びが展開するのかを探究する一人称研究である。 ● ままならない自身の身体と向き合い、各部位の繊細な身体感覚にも意識を向けながらフォームを創り変える日々だったこと ● その道のりはアップダウンの連続でとても陰しく、膝の怪我にも見舞われたこと ● リハビリを続けるなかで、日常の歩き方に根本的な問題があることに気づき、「練習は競技場だけにあるのではなく、立つ・歩くといった生活の基本動作を問い直すことも重要な練習である」という意識が芽生えたこと などを、身体知の学びのプロセスの実践的知見としてまとめている。 競技と生活を一体にして自らの身体を問いなおすことの重要性は、従来の身体知研究ではほとんど論じられることのなかった学びの実態であり、本論文の第一の独自性であると本学位審査委員会は評価している。 第一の研究は次の仮説を生み出すきっかけとなった。身体運動にはことばだけでは迫りきれな				

論文審査の要旨及び担当者

No.2

い微妙な「表情」（生々しいゲシュタルト）が潜在しており、それを感得することが身体知の学びを進める上で重要なのではないかという仮説である。ここで「表情」とは顔のことではなく、ひとやものの動きのゲシュタルトに宿る、生々しくありありとした姿を指す哲学的概念である。

堀内くんは、「表情」を感得することが、身体感覚への志向性や身体部位どうしの意外な関係性への気づきを促し、ひいては自身の身体を問い直すことに有効であると着想し、学び手に「表情」の感得を促す web アプリ『HJ-Playground』（HJP）を開発するという第二の研究を行った（論文の第二部：第10章から15章）。

従来の身体知研究では、モーションキャプチャで関節の時系列三次元位置データを撮影し、関節点群のあいだに骨格に応じた線を引いて「棒人間」を作成し、分析してきた。しかし、身体を「棒人間」として見ていると骨格知識や既存の理論の固定観念に囚われやすく、「表情」の感得の妨げになりがちである。その着想を基に、むしろ棒人間の線をすべて取っ払って関節点群のあいだに（実際の身体には存在しない）補助線を自由に引いた図形（「表情図形」）を創るという画期的なアイデアを堀内くんは編み出した。HJPは、それらの図形が醸し出す「表情」を感得し、併せて身体感覚をことば化することを学び手に促すことができる。ストリートダンサーと三段跳選手にHJPを使ってもらい、彼らが「自身の身体を問い直す」様を確認する実験も行った。

第二の研究は、身体知研究に「表情」という哲学概念を持ち込み、学び手が主体的に身体を問い直すことを支援するという画期的で独自性豊かなアイデアに基づくものであると、本学位審査委員会は評価している。

堀内くんの論文の意義は、第一に、身体知の学び手が競技と生活を一体にして自らの身体を問いなおすことの重要性を実践的に示したこと、第二に、ことば化だけでは必ずしも気づき得ない運動のゲシュタルトが醸し出す「表情」に着目し、「表情」の感得を促すことを通して身体知の学びを支援するアプリを開発するとともに、その有効性を確認したことにある。本論文は、身体知研究にとってランドマーク的な成果であり、近未来に有用な知見と指針を与えるものであると本学位審査委員会は考えている。

これらの成果は、堀内くんが、高度な研究を行うために必要な研究遂行能力、及び新たな分野を切りひらく発想力、並びにその基礎となる豊かな学識を有することを示すものとする。よって本学位審査委員会は、本論文の著者堀内くんが博士（政策・メディア）の学位を受ける資格があるものと認める。